

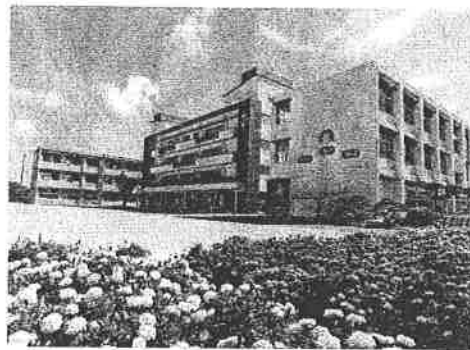
これからの小学校教育

から抜すい

忠田 正

一 はじめに

私は、教職に就いて現在三十八年目を迎えている。その間、小学校現場で二十二年、教育行政で十六年仕事をしてきた。昔も今も小学校は、学習の場であり、学力をつけることが大きな役割である。そして、日本の学校教育は、諸外国と比較しても、その役割を十分に果たしてきたと考えている。国際的な学力調査にお



倉敷市立茶屋町小学校全景

いて、日本の子どもたちが、概ねトップグループの成績を残していることからそのことは裏付けられている。

しかしながら、そうした学力の高さに反して、日本の子どもたちは、自分に対する「自信」や、物事に取り組む主体的態度（「やる気」）という点においては、諸外国と比較して決して高いとは言えない状況にある。

自らに対する「自信」は、自分のよさや強みに対する自覚につながり、自分の将来や困難な事柄に立ち向かう力になる。「やる気」を持つことは、物事に主体的に関わり、未来への展望を開き、よりよい状況を生み出す力になる。

今、生涯学習の時代である。また、学校教育で学ぶことには、おのずと限度がある。自らが主体的に学び続けることなくして、これからの時代に必要な知識や技能、思考力や表現力・判断力などを身につけることは、相当困難である。

私は、このような現状を踏まえ、今後の小学校教育においては、「自信」と「やる気」をいかに育てるかということが大きな課題だと考えている。そして、私がなぜそう考えるに至ったか、また、「自信」と「やる気」を育てるためにどのような実践を試みているかを述べてみたい。

二 学習指導要領の変遷から

平成二十九年三月に新学習指導要領が公示され、移行期間を経て、小学校では平成三十二年度から全面实施される。昭和二十二年に初めて学習指導要領（試案）が示されて以来、今回が八回目の改訂となる。この間、時代の要請等に応えながら、必要とされる改善がなされてきた。

私が教職に就いた昭和五十六年度は、いわゆる「ゆとりと充実」がキーワードになった昭和五十二年改訂の学習指導要領が全面实施された時期であった。この改訂は、それまで増加の一途であった授業時間を約一割削減し、指導内容も大幅に削減するなど、戦後の学習指導要領の改訂の方向を大きく変えるものであった。いわゆる「ゆとり」を目指す方向に大きく転換する改訂となった。

そして、平成元年及び平成十年の各改訂により、いわゆる「ゆとり」路線が進んでいったのである。

それぞれの改訂が、学校現場に大きな影響を及ぼしたことは当然

であるが、私にとって特に強く示唆を受けたのは、平成元年の改訂である。この改訂により、小学校低学年には、社会科と理科を廃止して「生活科」が新設され話題となったが、それ以上に私の意識や考え方に影響を受けたのは、いわゆる「新しい学力観」と呼ばれた評価の考え方の導入であった。

それまでは、知識や技能などをより多く、より効率的に身に付けさせることを重視する学力観であったが、この時示された「新しい学力観」は、知識や技能を学力の中核と捉えるのではなく、知識や技能の習得を図りながら、学習への関心・意欲・態度の育成をより重視しようとするものであった。そして、児童の学習記録等を記載する公簿である指導要録や通知表の各教科の評価の観点として、そのトップに教科に対する「関心・意欲・態度」が位置づけられたのである。それから後、今日までこの学力観は継承されている。

私は、この学力観は画期的だと感じた。目の前にいる子どもたちは、「あなたの良いところはどこ？」と尋ねても答えることができない。テストでは良い点が取れるのに、そういう自分に対してあまり自信を持ってない。与えられた課題に対しては真面目に取り組むが、自分で考えて意欲的に取り組むことは苦手である。このような子どもたちが多いことに改めて気付かされ、子どもたちの学習意欲を高め、学習への関心や主体的な態度を育てることの大切さを痛感した。そして、子どもたちに欠けており、しっかりと育てな

ければならない重点的課題を、「自信」と「やる気」と捉え、自ら
の実践においてこのことを大切にしようと考えた。

当然のことながら、全国の学校現場もこの「新しい学力観」を踏
まえて、学習指導の改善を進めていったのである。

そして十年後、平成十年の学習指導要領の改訂が行われた。この
改訂は、いわゆる「ゆとり」路線をさらに進め、授業時間数や指導
内容を大きく削減・縮減するものであったため、当初から学力低下
が懸念され、その後行われた国際的な学力調査等により、その懸念
が裏付けられるような結果が表れた。知識や技能面だけでなく、知
識や技能を活用する能力も、国際的にみてトップクラスではなくな
り、世を上げて「学力低下」が問題となった。

三 各種の学力・学習状況調査の結果から

平成十年当時、教育行政に携わっていた私には、「学力低下」に
関する議論に対し少々違和感があった。当時、この議論の中で問題
とされたのは、知識や技能の習得状況や、これからの時代に必要な
知識等の活用能力（いわゆる「PISA型学力」と呼ばれるもの）
であり、そのこと自体は問われるべき必要のあることであったと考
えている。しかしながら、それまでの約十年間、日本の学校現場で
は「新しい学力観」を掲げ、学習への「関心・意欲・態度」を学力
の中核と捉え、その育成を目指して授業改善を進めてきていた。「学

力低下」の議論で先ずもって問われなければならないのは、その取
組はうまくいっているのか、どのような成果や課題があるのかとい
うことであるべきだと考えた。にもかかわらず、世間の関心はそこ
にはあまり集まらず、学力調査等の結果に対しても、そうしたこと
への論及はあまり大きく取り上げられなかったように思う。

では、私を含め学校現場が重点的に取り組んできた子どもたちの
学習に対する「関心・意欲・態度」の状況は、改善されていたので
あろうか。

ベネッセ教育総合研究所の「第2回学習基本調査報告書 小学生
版（一九九六）」によると、小学生の「学習への意欲と感動」の状
況について、「科目によって差はあるが、少ない科目では三分の一
から五割弱の児童が学習の中であまり感動を感じない。学習への意
欲（好き）については、さらに低くなっている。」という状況であっ
た。

また、当時、日本、米国、中国、韓国の中・高校生を対象にして
行われた調査でも、日本の生徒の自己肯定感や、学習意欲が、他国
と比較して大きく下回っている状況が報告された。「新しい学力観」
の考え方が目指した学習への「関心・意欲・態度」を重視する取組
は、決してうまくいっているとは言えない状況であった。

次に、近年の状況についてであるが、日本青少年研究所が、二〇
一二年四月に公表した日米中韓の高校生を対象とした「高校生の生

活意識と留学に関する調査」によると、自己評価に関して次のよう
な結果であった。

・ ポジティブな項目全般で日本の高校生の肯定率が低い。特に、
自分を価値ある人間と思う自尊感については、米中韓の半分以
下の水準である。

・ ネガティブな性格項目について、日本は「自分はダメな人間だ」
「自分の将来に不安を感じている」そして「人並みの生活がで
きれば十分だ」といった項目での比率が際立って高い。

平成十年当時と経年的な比較はできないが、日本の高校生の自己
肯定感や自尊感情の低さは、依然として改善されているとは言えず、
こうした状況に対する小学校教育の責任は重いと考えている。

私たちは、単に子どもたちの学力を高めるだけでなく、「自分
もできた」、「がんばればできる」という「自信」や、自分にもよい
所があり大切にされているかかげのない存在であるという自己肯
定感を高めること、そして、やればできるという自信を力にして、
学習や生活の改善に向けて「やる気」を育てることを目指して実践
を進めなければならないと考えている。

四 茶屋町小学校の実践

① 基本的な考え方

茶屋町小学校では、児童の実態や地域との関わりなどにおける課

題を踏まえ、その改善に向けて教職員一丸となって取り組んでいる。

そして、これまで述べてきたように、課題の改善を図る中で、子ど
もたちに「自信」と「やる気」を育てることが、これからの小学校
教育において非常に重要だと考えている。

また、本校は、児童数千二百四十四名、教職員数九十四名、四十
四年级の大規模校であり、教育目標を実現させるためには、全教職
員の共通理解・共通実践が不可欠である。

さらに、こうした実践を支えるのは個々の教職員であり、その指
導力の向上を図ることも重要である。そこで、基本的な方針として、
次の三つのことを掲げ実践している。

○「自信」と「やる気」を育てる

○共通理解・共通実践を進める

○教職員の指導力の向上を図る

② 共通理解・共通実践の取組

その一 学力向上に向けて

本校は、毎年新採用の教員が三、四名配置されている。初任者は、
授業の基本的な流れや留意点など、どのように考えて進めていけば
よいのか不安を感じている。また、各学年六学級規模の学年団にお
いて、各担任の授業の進め方が異なっていると、小学校六年間を通
しての積み上げが図りにくい上に、子どもたちも毎年授業の進め方

が変わり戸惑うことになる。また、専科の教員にとっても、各学級のやり方が違うと指導がしくくなる。

そこで、基本的な授業の進め方をそろえるために、岡山県教育委員会が作成した「岡山型学習指導のスタンダード」をベースにして実践している。また、学習規律についても基本的なことをそろえるため、本校独自に検討し「〇〇の項目に整理したものを「茶小勉強がんばっ一〇（テン）」と名付け、児童全員に配布するとともに、各学級にも掲示して意識づけている。

こうした取組の徹底を図るためには、折に触れて教員に働きかけるとともに、実際の授業を見に行き、指導助言をすることも大切である。

また、授業で学んだことを定着させるためには、家庭学習も重要である。そこで、同じ中学校区の小学校と中学校が連携し、共通の取組ができるよう担当者が協議し、「家庭学習の手引き」を作成・配布して共通実践を進めている。

このような取組を地道に続けることにより、学級間の取組の差を少なくし、子どもたちが安心して学習できる基盤づくりを進めている。しかしながら、授業が理解できず学習成果も思うように上がらずに苦しんでいる児童や、どうしてよいかわからずあきらめているように見える児童もいる。そのような児童が少しでも学習に対して前向きになれるよう、個別指導にも取り組む必要がある。

そこで本校では、「九九マスター大作戦」や「筆算マスター大作戦」と名付けた取組を行っている。

「九九マスター大作戦」というのは、三年生以上でまだ九九を十分マスターできていない児童を対象に、昼休みを使って九九を聞き取る活動である。各学級担任が把握した児童に呼び掛け、昼休みに算数教室に来てもらい、少人数指導担当者や管理職などが、一人一人の子どもが九九を言うのを聞き取り、すべての段を三回合格すると修了し、認定証を出すことにしている。修了した児童の表彰式は、校長室で担任同席のもとに行っている。児童は、やや緊張しながらも嬉しそうな表情を見せてくれる。そして、彼らは一緒に頑張った仲間や、応援してくれた先生や家族への感謝を語り、頑張った自分自身に少し自信を持ち、次に挑戦する学習への意欲を高めている。表彰式の後に記念写真を撮り、頑張りカードに写真を貼り、認定証とともに家庭に持ち帰らせている。写真や認定証を見た保護者からは、子どもたちの頑張りへの感動や、学校の取組への感謝の声が届いている。この活動は、一昨年度から地域の方々にも協力をお願いし、十数名の方が参加して児童の九九を聞いてくださっている。

「筆算マスター大作戦」は、二年生を対象に筆算のたし算・ひき算が十分マスターできていない児童を担当が把握し、昼休みに集めて筆算の練習とテストを繰り返して、すべてのプリントで百点を取ったら合格とする取組である。この取組も「九九マスター大作戦」と

同様の進め方で行っている。子どもたちが、合格することで少しでも自信を持ち、他の学習に自ら意欲的に取り組むことを期待している。

その二 落ち着いた学習環境づくり

子どもたちが安心して登校し、楽しく学校生活を送ることができれば、自分の力を発揮し、それぞれの自己実現を図ることができる。そのためには、落ち着いた学習環境を整えなくてはならない。そこで私たちは、次の四つの取組を重点的に行っている。

- ・ ハイタッチあいさつ運動
- ・ 靴箱の靴そろえ
- ・ 美しい歌声のあふれる学校
- ・ 黙って集合

基本的な生活習慣には、あいさつ・返事、靴そろえ、廊下歩行、そうじなどがある。どれも大切なことだが、すべてをきちんとできるようにしようとする、どれもが中途半端になりがちである。そこで、本校では、「ハイタッチあいさつ」と「靴箱の靴そろえ」に重点的に取り組むことにした。そして、徹底して取り組み成果を上げるにより、他の取組への波及効果が期待できると考えた。

一つ目の取組の「ハイタッチあいさつ運動」であるが、これは、



ハイタッチあいさつ運動

従来のあいさつ運動をより一層盛り上げることを目指して、児童会が呼び掛けて始めた取組である。運営委員会や六年生等の有志の児童が校門付近に立ち、「おはようございます」のあいさつとともに、ハイタッチをするのである。初めは少し恥ずかしそうにしていたハイタッチも、二年間継続してきて、今では多くの児童がごく自然にハイタッチをしながらあいさつができるようになった。

また、毎週水曜日にあいさつ運動に参加していただいているPTAの方々も、子どもたちとハイタッチをしながらあいさつしてくださり、「楽しい」「元気をもらえ」と喜んでくださっている。

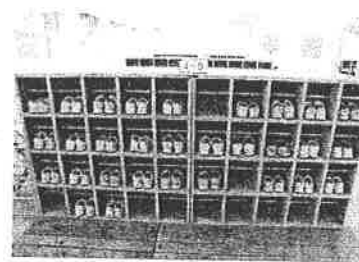
さらに、毎週金曜日には、地域の高齢の方々が、自主的にあいさつ運動に参加してくださり、近所の子どもたちと親しくあいさつをしたり、気になる子どもたちに声をかけたりしてくださっている。

このハイタッチあいさつ運動には、時に不登校気味の児童や、学級において孤立しがちな児童が参加し、登校の動機づけになったり、

上級生に導かれて教室に入るきっかけになったりしている。

手と手が触れ合う温かいあいさつによって、児童だけではなく、教職員も保護者も地域の方々も、一日の始まりを明るい気持ちで迎え、元気をもらうことができる。本校の特色ある取組として、今後長く続いていくことを願っている。

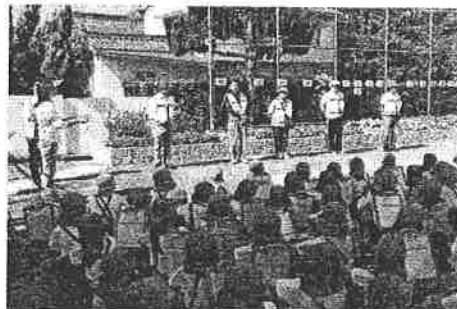
二つ目は、「靴箱の靴そろえ」である。子どもたちが落ち着いた生活をしているかどうかは、靴箱を見ればわかると、先輩の先生方がよく言われていた。私も経験的にこの意見と同じように感じている。



靴箱のくつ揃え

生徒指導主事や週番の教員が、学期始めなどに重点的に呼びかけるとともに、各学級においても係活動等を工夫して意識化を図っている。できているかどうか目に見えるこの取組は、頑張ればすぐに成果が表れるので、分かりやすい。外部のお客様が来られ、整然とそろった靴箱を見て感心してくださることも児童にとって励みになっている。

三つ目は、「美しい歌声のあふれる学校」である。本校は、例年秋に実施される倉敷市学校音楽祭に、五年生児童全員が参加し、鍛え上げた美しい合唱を発表している。前年度に参加した六年生の歌



地域ボランティア（安全マップ作り）

よる学校支援事業」に取り組んでいる。これは、学校の教育活動の充実を図るために必要なボランティア・ティーチャーを募集し、学校が依頼したコーディネートが、地域等の団体や個人に協力を働き掛け、「だれに」「いつ」「何を」「していただくか」など、具体的な日程や支援内容等に関する運営を行うものである。従来学校が主になって行っていたこうした業務を、地域の方々に担っていただくことにより、教員の負担軽減や地域連携の拡充が図られるとともに、地域の活性化や参加者の生きがい・やりがいにもつながっていくものと考えている。現在本校で支援していただいている活動には、次のようなものがある。

伝統文化体験、地域探検、地域安全マップ作り、ミシンや手縫いの実習、そろばん実習、九九の聞き取り、和楽器演奏、遊具のペンキ塗り、ハイタッチあいさつ運動等
次に、本校独自の特色ある取組である「ふるさと学習」について

声を聴き、先輩のような美しい歌声で歌いたいという憧れがつかつていき、それが本校の良き伝統になっていると感じている。大規模校での合唱指導は、多くの困難を伴っているが、市民会館での発表を成功させた児童は、達成感を味わうとともに、やりぬいた自分への自信をもつことができるのではないかと感じている。

四つ目の取組は、「黙って集合」である。千二百名以上の児童が一斉に移動し集合する儀式や集会行事等において、できるだけ効率的・効果的に集合し、整然とした活動を実現するため、各担任が、行事の意義や目標を事前に十分指導し、黙って行動することを徹底している。以前、生徒指導が困難な時期には、こうした当たり前のことが徹底せず、落ち着かない状況に苦慮したこともある。「少しぐらいいしゃべっていてもまあいいか」という指導のゆるみが、次第に大きな問題につながっていった例は少なくない。一度そのような状況になると、元の状態に戻すのは非常に困難で、長く粘り強い指導が必要になる。私たちは、そうした教訓を生かし、日々の小さな実践を積み重ねている。

その三 地域等との連携による学習指導の充実

本校では、以前から地域の方々のご協力を得て、様々な教育活動を支援していただいていたが、より組織的・効果的な支援体制を確立するため、平成二十八年度から市教委の事業である「地域連携に



新聞づくり

述べる。平成二十八年に地元の歴史家がまとめられた『再改訂版 親と子の茶屋町史』が、本校の全児童の家庭に配布された。この本は、茶屋町の歴史文化等について、子ども向けに書かれたものである。一般的に郷土史は、子ども向けに書かれておらず、小学生には読みづらいが、この本は小学生でも読めるよう工夫されている。そこで、本校の全児童が毎年この本を活用し、小学校を卒業するまでに、一通り茶屋町のことを学ぶことができるようにしたいと考え、「ふるさと学習カリキュラム」を作成した。以来、六年生の全児童が、夏休みの課題としてこの本を読み、自分が興味関心を持った内容を新聞にまとめており、その作品は、各種の新聞コンクール等で高い評価をいただいている。

このように、地域の方々は、児童の教育環境の充実に向け、様々な形で応援してくださっており、私たち教職員は、その期待に応えるべく、地域とより一層連携を深めながら、教育活動を進めていき

たいと考えている。

③ 教職員の指導力の向上

その一 教職員の士気・意欲の向上

校長が目指す学校経営方針や目標等が、教職員に正確に伝わり、その実現に向けて一人一人の教職員が全力を尽くすことができるようにするには、互いに意思疎通や共通理解を図るとともに、職場の士気や職務に対する意欲を高める必要がある。そのため、私は、一人一人の教職員と一対一で話し合ったり、自分の思いを伝えたりする機会を、できるだけ多くとるように心がけている。

現在、学校では、教職員が自分の一年間の重点的な取組をまとめた自己目標シートを作成し、それをもとに校長と教職員が、目標とする項目・内容・評価等について、年度初め、中間期、年度末に面談するシステムが導入されている。面談では、一人一人の日頃の思いや悩み、学級や児童の様子、自己目標シートの内容などについて話し合う。普段は落ち着いて話し合うことがなかなかできないが、面談の機会に少しでも意思疎通を図るようにしている。そのため、一人当たり最低でも二十分以上の時間が必要で、大規模校においては、この時間を確保することが非常に難しいが、コミュニケーションを図る貴重な機会として大切にしたいと考えている。

また、定期的に提出される週計画簿等へ、個々の教員の頑張りや

良い点などを書いて返すなど、一人一人の努力や成果等を認め励ますことにより、より一層意欲を高めることができればと考えている。

その二 若手教員による校内自主勉強会

本校では、平成二十六年から若手教員が中心となり、月一回の自主勉強会が開かれている。毎月テーマを決め、勤務時間が終わった後、先輩の実践発表に学んだり、互いの実践を交流したりしている。夏休みには他校の教員にも声を掛け、自主的に学ぶ仲間が集まっている。このような取組が五年目を迎えているが、ベテランの教員



自主勉強会

が参加したり、時に講師を務めたりして、若手を支え励ましていくことが、勉強会の継続と充実に大きな力になっている。また、若手やベテランがこのように真剣で主体的に学び合う姿勢は、職場に適度な緊張感や温かい雰囲気を醸成し、職員の一体感につながっていると感じている。

宮城教育大学元学長で教育学者の林竹二先生は、「教師

の根本の仕事は、学ぶことだ。」とおっしゃられた。かつては、各地区や学校に自主的な勉強会があり、先輩から後輩に、教育への思いや願い、指導の技術等が継承されていた。現在、そうした場は少なくなっているが、私は、教員自身が学ぶ姿勢を持続けることが、何より大切な教育の原動力だと考えている。

五 おわりに

岡山県教育委員会のホームページによると、県内の公立小学校校数は、昭和三十年度の六百十一校をピークに減少を続けており、平成二十八年度には三百九十八校となっている。約六十年の間に学校の数が三分の二になったことになる。急激な少子高齢化が進んでいる現状からすると、この傾向は今後も続き、小学校の数はさらに減り続けることが予想される。

一方、コンピュータの普及などによる情報化社会の進展に伴い、小学生の学習環境も大きく変わり、単に知識を得るだけでなく、必ずしも学校に行かなくても学べる環境が整ってきている。

このような状況の中で、今後、小学校教育に期待されることは大きく変化するかもしれない。私たちは、そうした変化に柔軟かつ迅速に対応しつつ、目の前にいる子どもたちの現実に向き合い、子どもたちの将来に必要な力を、着実に身につけさせていかなければならないと考えている。

(倉敷市立茶屋町小学校長)